博物館学雑誌 第31巻 第1号（通巻43号）1～19ページ 2005年11月

【論文】

歴史ミュージアムとしてのナショナル・ポートレート・ギャラリー
―設立の目的と経緯をめぐって―

The National Portrait Gallery as a History Museum
: The Purpose and Process of its Establishment

横山 佐紀※
Saki YOKOYAMA

Abstact:

This paper examines the purpose and process of the establishment of the National Portrait Gallery, Smithsonian Institution (NPG). The NPG was set up by Public Law 87-443 (National Portrait Gallery Act, 1962) and opened to the public on October 7, 1968. In this process, the major figure involved was David E. Finley, and Senator Theodore Francis Green who helped him push the project forward. Their correspondences and papers show how they directed the NPG as a history museum and viewed its purpose as "educating the public in American history and fostering patriotism" by exhibiting the portraits of historial individuals.

This stated purpose implies some critical issues on representing history. Being a history museum and not a Hall of Fame, the Gallery gives priority to a setter's historical importance, as well as the portrait's artistic merit However, this This policy includes a controversial poiht: whether "not being a Hall of Fame" can be compatible with representing the American history through individuals. In other words, given that NPG is not a Hall of Fame but a museum that conveys the personality of American history, would it be possible to accept the individuals who represent shadowed side of history as a part of American history and patriotism. This inevitably questions the notion of "representing the history of a nation state through individuals" itself. The NPG opened its doors as a history museum with some fundamental issues in its purpose.

※スミソニアン協会ナショナル・ポートレート・ギャラリー（フェロー）
名古屋大学大学院教育発達科学研究科

はじめに

1968年10月7日、ナショナル・ポートレート・ギャラリー（National Portrait Gallery、以下NPGと表記）がワシントンDCに開館した。スミソニアン協会（Smithsonian Institution）の一部門としてのNPGは、1962年4月27日の連邦議会において「ナショナル・ポートレート・ギャラリー法（National Portrait Gallery Act）」として設立が承認され、同法第3項(b)により「合衆国の人々の歴史、発展、文化に重要な貢献をした人々を描いた肖像、影像を展示、研究する入場料無料の公共ミュージアムとして機能する」と規定されている[(1)]。

NPG初代館長のチャールズ・ナグル（Charles Nagel）は、NPGの役割について、次のように述べている。「第一に、われわれのギャラリーは、決して芸術のギャラリーではなく、真摯な国家的目的をもった歴史のミュージアムとしてみなされなければならない。それゆえに、肖像（likeness）がコレクションのために選び出される際には、いつも人物が最も重要な要素であることが特に心に留められなければならない」[(2)]。

NPGはポートレートに描かれた「人物」の歴史的重要性が最優先される「歴史ミュージアム」であって、決してポートレートとしての芸術性が重視される芸術ミュージアムではない[(3)]。言い換えるならば、NPGとは、歴史的に重要であると判断された個人を選び出し、彼らのポートレートや達成、パーソナリティを通じてアメリカの歴史を描き出すミュージアムである。それでは、その「歴史的に重要な人物」を、誰が、いかなる基準に基づいて評価し選択するのか。これがNPGの核心のひとつであることはいうまでもない。人物の「選択」から成るNPGは、同時に、歴史的重要性が低いと認識される人物を排除しているのであり、本来的にきわめて政治的な性格を備えた歴史ミュージアムであるといえる。

ミュージアムが単なる静的な展示空間ではなく、選択と排除、多様な力学や利害関係が働く政治的空間であることは、ここ10年ほどの間、アメリカを中心とした研究により明らかとなっている[(4)]。これらの問題は、ともすればキュレイターなどの展示を構成する人々や、彼らが関与する段階へと帰せられがちであるが、問題の所在をミュージアムの内部に限定することには、ミュージアムや展示と社会との関連性を見落としてしまう危険性が伴う。

たとえば、ミュージアム内部に注目する近年の動向のひとつとして、展示やカタログといった「出来上がったもの」のみならず、ミュージアム職員、スタッフへのインタビューや教育プログラムへの参与観察を行い、展示が構成、変更されていくプロセスを分析するフィールドワークを適用した研究が挙げられる。このような研究は、これまでのミュージアム研究が、展示自体や、展示に関するテクスト（カタログなど）、資金集めの冊子などのすでに生み出されたメッセージの分析に頼っており、ミュージアムの中で何が起こっているのかを無視してきたと批判している[(5)]。

たしかに、ミュージアムにおけるメッセージの生成や、そこに見られる政治的な問題は、展

示にのみ留まるのではない。展示が構築されていくプロセスにおいてミュージアムの中で何が行われているのかこそが検討されるべきであるとする批判そのものは妥当である。

その一方で、ミュージアムがいかなるメッセージを発するのかは、内部における相互作用のみならず、ミュージアムが置かれている社会環境や政治状況、さらに資金源などにも影響を受けていることも事実である。

アメリカのミュージアムは、元来、フランスなどに比較し民間主導型であるといわれるが、レーガン政権以降、文化予算が縮小された影響を受け、寄付金などのプライベートな資金を主要な源泉とする傾向がますます強まっている。アメリカのミュージアムにおける民間のプレゼンスの大きさは、運営資金の面ばかりでなく、コレクションそのものが、経済活動を通じて莫大な財を成した個人によって蓄積され、それに基づいてミュージアムが設立されていることにもよく表れている(6)。王族、貴族のコレクションを国民のミュージアムへと転換することのなかったアメリカでは、ミュージアムの設立が経済力を基盤とする個人によって行われることが多く、設立に果たした彼らの影響力、およびこれを可能とした社会経済的環境を軽視することはできない。

こうした状況に鑑みると、ミュージアムが伝達するメッセージについては、内部における相互作用の結果としてばかりではなく、「ミュージアムと社会との関わり」と一揃いの問題として扱われるべきであり、ミュージアムや展示の「政治性」の問題もこの延長線上において検討する必要があるといえるだろう。したがって、そのミュージアムがいかなる環境で、何を目的として設立されたのか、そこに関与した社会的要因は何であるのかを検討することは、ミュージアム内部を対象とするフィールドワーク的分析の適用いかんに関わらず不可欠である。

本稿はこのような問題意識に基づき、NPG が設立当時の社会状況のいかなる影響のもとに、その目的が設置されたのかを、そこに関わった人物の文書から明らかにすることを試みるものである。

NPG 設立の経緯に関しては、ポイントンが詳細にしている(7)。ポイントンはポートレート研究という美術史的関心から、ロンドンのナショナル・ポートレート・ギャラリー（以下NPG ロンドンと表記）に関する研究を行っており、「ナショナル・ポートレート・ギャラリー」というミュージアムの形態一般を「国家や国民のヒーロー（そしてごくまれにヒロイン）の表象を通じてナショナル・アイデンティティを祀るものである」と捉えている。その上で、ワシントン DC における NPG 設立を「1960 年代後半の革命的な社会変化の脅威に対し現状を維持するために、いかにポートレートが用いられたのか」という視点から分析している(8)。ここでいう「革命的な社会変化」とは、当時の冷戦を指す。ポイントンは、冷戦期においてポートレートを通じてパトリオティズム（愛国主義）を促すことは一般的であったとし、文化プロパガンダにおけるポートレートの活用に注目している。そのため、NPG を旧ソ連に対抗するナショナ

ル・アイデンティティを表象する機関として位置づけ、アメリカにおける19世紀以来のNPG設立構想に目を配りつつも、冷戦を中心においた議論を展開している。

しかし、1950年代から1960年代は冷戦ばかりでなく、公民権運動に関わる一連の分裂、闘争が噴出し、「アメリカとは何か」が問われた時代である。さらに、この時期アメリカは南北戦争100周年を迎え、アメリカの統一を主眼とする関連記念行事が行われていた。この歴史的出来事を契機として、ミュージアムや歴史に対する関心が高まっていたことは、NPG設立にも影響を及ぼしたと考えられる。ポイントンがNPG設立の背景として結論づける冷戦は、たしかに1968年のオープンニングに一定の意味を与えたであろうが、冷戦下におけるアメリカ国内、特にもミュージアムをめぐる状況への考慮なしには、NPG設立の経緯を充分に捉えることはできないであろう。

そこで、本稿においてNPG設立の経緯、目的を明らかにするにあたっては、当時の社会的文脈に配慮するよう試みたい。もとより、NPG設立は長年の構想の結果であり、実現に至るまでのすべてをこの小論において論じきれるものではない。本稿では、NPG法が議会で承認されるまでのNPG設立における最初期、すなわちNPGの目的についての最も基本的な合意—「歴史ミュージアムとしてのNPG」—が設立に関わった人々の間で形成されるまでに期間を限定したい。

はじめに18世紀以来のNPG設立構想の概要を振り返る。「ポートレート・ギャラリー」というミュージアムの形態そのものは、ワシントンのNPGに特有なものではなく、1856年にロンドンにオープンした「ナショナル・ポートレート・ギャラリー(NPGロンドン)」に始まる。ワシントンのNPGの歴史において、NPGロンドンは、常に重要な存在であり続けてきた。というのも、NPGロンドンは、ワシントンのNPG設立に直接影響を与えたことに加え、両NPG間においてスタッフの交流が続くなど、現在でも緊密な関係を保っているからである。ワシントンがひとつのモデルとして受け容れることとなったNPGロンドンの概略と、19世紀アメリカにおけるNPG構想の源について、アメリカにおけるNPG設立の背景としてはじめに触れておきたい。

次に、アメリカにおけるNPGが構想から実現へと大きく踏み出した1950年代に設立の中心となった人物に注目し、当時のアメリカにおけるミュージアムを取り巻く状況に照らし合わせながら、NPGの目的をめぐる議論を検討する。これらを通じて、NPGが「歴史の教育と愛国心の涵養」という観点から議論され、実現されていったことを明らかにする。最後に、NPG法の最終的な承認に先立ち、下院で行われた同法に関するヒアリングの中で、NPGにおける愛国心や歴史の教育がどのように理解されていたのかをたどり、NPGがその目的に関連して出発から抱えることとなった齟齬について言及したい。

なお、本稿では一般的な名称が定着している個別の場合を除き、博物館、美術館の区別を設

けず、これらを総称するものとして「ミュージアム」を使用する(9)。

1　NPGというミュージアム

歴史的人物のポートレートから成る「ナショナル・ポートレート・ギャラリー」というミュージアムのあり方は、1856年、ロンドンにオープンしたNPGロンドンに始まる。現在、「ポートレート・ギャラリー」はロンドン、ワシントンの他、エジンバラ（1882年設立）、ダブリン（1884年）、キャンベラ（1998年）、ウェリントン（現在移転のため閉鎖中）、オタワ（2006年予定）に設立または予定されており、年に一度、各代表者が集まる会合が開かれている。これらアングロ・サクソン圏に点在するポートレート・ギャラリーの大本となり、多大な影響を及ぼしたのがNPGロンドンである。

NPGロンドンは、「芸術ではなく歴史についての、また、芸術作品としてみなされるあるイメージ（像）の質や特徴についてよりも、描かれた人物のステイタスについての」ミュージアムとして設立された(10)。すなわち、NPGロンドンの最も基本的枠組は、あくまでも描かれている「人物」の重要性を評価の基準とすることであり、芸術のミュージアムではなく、彼らの生涯や達成を通じて歴史を教育する「歴史ミュージアム」であることにある。

歴史ミュージアムとしてのNPGロンドンが19世紀半ばに求められた一因に、ナポレオン戦争やクリミア戦争などのもと、イギリスとしてのナショナル・アイデンティティが問われる状況にあったことが挙げられる。「国家的装置としてのナショナル・ポートレート・ギャラリーの最初の公式の提案は、ナポレオンの興隆と時期を同じくしており、ナポレオンの文化帝国主義は海峡のこちら側にかなりの影響を及ぼした」といわれるように、イギリスの歴史的人物を通じて人々に国家の歴史を教育することにより、ヨーロッパ諸国に対抗するイギリス性（Englishness）を涵養する役割がNPGロンドンには期待されていたという(11)。

一方、アメリカにおけるポートレート・ギャラリー設立は、18世紀半ば以来、形を変えながら幾度か構想されてきた。

ひとつは、チャールズ・ウィルソン・ピール（Charles Willson Peale）のミュージアムである。自身が画家であり、アメリカ独立戦争時には独立を支持するホイッグ党の熱烈な党員でもあったピールは、1786年、フィラデルフィアに個人ミュージアム（いわゆる「ピールのミュージアム」）を開設した。化石、動物の剥製などの自然物の収蔵品に加え、ピールは独立戦争の英雄を記念する一群のポートレートをコレクションしていた。彼が他界した1827年には、アメリカの秩序と文化の形成に貢献した人々や、これに好意的であったヨーロッパの人々のポートレートが200点以上収集されていたという(12)。

もうひとつが、伝記集の発行である。これは、ミュージアムという形態ではないものの、NPGの基本的枠組みである、歴史的に重要であるとされる人物を選び出し、人々に提示するという

発想において、NPG 構想に連なるとみなすことができる。

たとえば、ロングエーカーとハーリングとによる『卓越したアメリカ人のナショナル・ポートレート・ギャラリー』(以下、『卓越したアメリカ人』と表記)は、独立戦争に寄与した人々のポートレートを中心に、1834 年から 1837 年にかけて一般向けに分冊で刊行、販売された。人物ひとりにつき、エッチングのポートレート1点と、その人物に関する伝記的記述数ページが割かれ、全4巻を通じて政治家、軍人を中心に 144 名の人物が収められている (13)。『卓越したアメリカ人』の特徴は、伝記的記述ばかりではなく、エッチングによるポートレートを収録することにより、人々に重要人物の相貌を広く伝えることが可能となったことにあるが、他にも独立戦争関係者や「建国の父」に関連した様々な伝記集が、18 世紀の終わりから 19 世紀半ばにかけて刊行された (14)。

このような伝記類の出版には、次のような当時の社会状況が関係していよう。

ひとつは、移民に対するアメリカ化である。19 世紀、特に後半のアメリカは、南北戦争後、工業化と都市化が急激に進み、大量の移民が都市部に押し寄せていた。様々な文化的背景をもつ移民の流入は、彼らをアメリカ化するための公教育の改革と拡大を生み、民衆啓発のための施設として公立図書館、ミュージアム、劇場などの建設を引き起こした (15)。

アメリカの歴史的重要人物を人々に伝える伝記集の出版は、いうなれば、工業化の時代、大量に流入する移民にアメリカの歴史的人物を教育することにより、彼らをアメリカ化するためのひとつの手段であり、当時の社会的要請に応えるものであったといえる。

もうひとつが、アメリカの歴史の記録としての伝記集のニーズである。近代国家としての日の浅いアメリカにとって、ジョン・アダムスやジェイムズ・マディソン、ベンジャミン・フランクリンといった建国の父たちの生涯は、アメリカ初期の歴史に重なる。建国の父の時代が非常に間近であったことが個人的な回想を詳述する契機を提供し、伝記作家たちは、国家の記憶の空白を埋めることを急いでいたという (16)。さらに、アメリカ独立戦争に重要な役割を果たした人々が 19 世紀半ばごろに相次いで亡くなったことは「過去が逃れ去りつつある」ことを意識させ、その保存に人々の関心を向けさせたことも、人物を通じてアメリカの歴史を記録する伝記集の出版を加速させることとなった (17)。

2　スミソニアン協会と NPG

(1) メロン・コレクション寄贈

スミソニアン協会と NPG 設立構想との接点も、この時期に遡る。ピールのミュージアムは、彼が他界した時点で合衆国銀行 (Bank of the United States) に対し多額の負債を抱えており、1847 年には同行がピールのポートレートの売却をスミソニアン協会に申し出ていた。しかし、前年に設立されたばかりのスミソニアン協会は、財政的理由からこれを却下している。その後、

サミュエル・ラングレーがスミソニアン協会長官(Samuel P. Langley　在任期間 1887 年～1906 年) であった時代にも、ナショナル・ポートレート・ギャラリー設立の必要性は認められてはいたものの、スミソニアンの美術コレクションは自然史博物館内に場所を割り当てられたまま放置された。1920 年に、それは協会の独立した一部局となり、その 11 の部署のうちのひとつがポートレート・ギャラリーと称された。しかしながら、展示スペースの不足から、長年これらのコレクションは日の目を見ないままであった [18]。

NPG 設立の現実化は、コレクションのまさに核となる作品群を得て、はじめて大きく動き出すこととなる。すなわち、ハーディング、クーリッジ、フーヴァーの各大統領の下、財務省長官を務めたアンドリュー・メロン (Andrew W. Mellon) による、35 点のポートレートの寄贈である。彼はピッツバーグの銀行家メロン家の一員であり、美術品のコレクターとしても名高い。ワシントンのナショナル・ギャラリー (National Gallery of Art) は、彼が収集したコレクションの寄贈をもとに設立されている。メロンは、ナショナル・ギャラリーの初代館長にして芸術委員会 [19] 委員長であったデイヴィッド・E・フィンリー (David E. Finley) と共に、1930 年代以来 NPG 設立を検討していた [20]。1937 年にメロンは亡くなるが、アメリカの画家によるポートレート 35 点が 1942 年にナショナル・ギャラリーへと譲渡され、「20 年以内にポートレート・ギャラリーに類するギャラリーが設立されたならば、そこに寄贈すること」と指定された。

ちょうど 20 年後の 1962 年、NPG 法の成立により NPG の設置が承認され、1965 年 2 月 24 日、35 点のコレクションが NPG に受け入れられることとなった [21]。

（2）冷戦と南北戦争 100 周年

一方、関係諸機関に接触しながら、NPG を収容する建物をはじめとして NPG 設立の準備を実際に推し進めていったのはフィンリーである。まずはフィンリーが NPG の実現に向けてイニシティアティブをとり、それにスミソニアン協会が途中から関与していったというのが実情である。

フィンリーが NPG 設立に積極的に関わり始めるのは、1950 年代に入ってからであるが、その経緯をたどる前に、この時代のアメリカ国内における歴史への関心の高まりについて述べておきたい。

1950 年代のアメリカにおいて、ミュージアムや、歴史的出来事および歴史的人物のコメモレーション (顕彰行為) と関連して重要なことは、反共産主義の名の下に愛国主義を高め、国内の一体感を促進しようという空気が高まっていたことである。戦後、アメリカでは冷戦を反映し共産主義者への疑いの目が向けられ、彼らに対する攻撃が吹き荒れていた。また、政治家や文化人も、旧ソ連や共産主義の評価をめぐり分裂していた [22]。

イデオロギーをめぐる分裂が表面化する中、アメリカとしての「統一」を演出するために何よりも重要な役割を果たした（または利用された）のが南北戦争100周年（1961年～1965年）という歴史的モメントであった。歴史ミュージアムとしてのNPG設立に冷戦が関わっていることはポイントンが指摘しているが、そればかりでなく、アメリカの統一の強調を通じて愛国心を鼓舞する100周年記念行事が、人々の関心を歴史へと向けさせたことも、歴史ミュージアムとしてのNPG設立に影響していよう。

1950年代のアメリカ国内では、南北戦争100周年に向けたコメモレーション（顕彰行為）のイベントが、各地で数多く企画されていた。1950年代後半においても、南北戦争と何らかの関わりのある団体が、会員数を減らしながらも相当数存在し、ミュージアムや史跡の数はこの時期、増加の一途をたどっていたという。この状況はコミュニティの歴史の中でよく知られた出来事が顕彰されるとき、より顕著であったといわれる[(23)]。

人々の間に高まっていた南北戦争100周年への関心を反映し、1958年4月、連邦議会により南北戦争100周年委員会が設立され、アイゼンハワー大統領により、グラント将軍の孫にあたるグラント三世が委員長に指名される。この委員会は、歴史的行事を利用して愛国主義を広めることを目指していた。それは、グラント三世委員長の次の発言によく表れていよう。「（南北戦争に関する知識を広めることは）今日におけるより良き市民の源となり、また、我々の間に存在する破壊分子（共産主義―筆者註）に直面している今日にあってまさに必要とされる、さらなる愛国心の源となるのだ」[(24)]。

委員会が記念行事の企画などにおいて最大限配慮したことは、100周年関連行事を通じて再びアメリカを対立させることではなく、国家への忠誠心を強化し、国民的統一を強調することであった。ここでいう「統一」が南北戦争時の対立にのみ由来するのではなく、共産主義に対抗するための統一であったこと、さらに、国内で高まりつつあったエスニシティによる分裂―公民権運動―に対する統一であったことはいうまでもない[(25)]。

（3）デイヴィッド・E・フィンリーとNPG

南北戦争100周年記念行事や冷戦、さらにミュージアムや歴史そのものへの関心の高まりという社会的状況において、フィンリーはNPG設立の実現へと向けて精力的に活動を開始する。NPGを現実のものとするためにまず必要であったのは、場所の確保である。フィンリーが最初に着手したのは、このための手続きであった。

1952年、フィンリーは、駐車場建設のために取り壊しが決定していた旧特許局ビル（Patent Office Building、以下POBと表記。この時点では公務員委員会が使用）の保存に動き出し、1957年、この建物をスミソニアン協会の所有とし、ミュージアムとして使用することを認める法案を成立させる[(26)]。スミソニアン側がNPG設立に実質的に関与するのは、この旧特許局ビ

ル譲渡の時期からであり、フィンリーの文書に当時のスミソニアン長官、レオナード・カーマイケル（Leonard Carmichael）の名前が登場するのも、これ以降である。

当初フィンリーは、NPG を戦争や軍関連のミュージアム（War Art Museum, National Military Museum）と共に設立する案を抱いていた。1946 年 11 月 27 日にはトルーマン大統領宛に、大統領によって任命された助言委員会として、軍事ミュージアム計画に関するレポートを提出している。このミュージアムは設立法案の草稿まで作成されたものの、現実のものとなることはなかった[(27)]。

1950 年代以降、フィンリーは NPG の設立に集中していき、これに伴う発言、文書を多く残している。以下にいくつかの発言を取り上げるが、これらにはフィンリーが NPG をいかに構想していたのかが非常に明瞭に映し出されている。すなわち、「アメリカの歴史を次世代に教育するミュージアム」、「愛国心を鼓舞し、涵養するミュージアム」である。

たとえば 1950 年、首都設立 150 年を記念してナショナル・ギャラリーが行った展示『ワシントンの歴史を作った人々―1800 年－1950 年』は、ワシントンの歴史的出来事に関わった人々のポートレートから成る展示であり、NPG の「首都ワシントン市版」とでもいえる企画であった。その展示カタログの冒頭において、彼は次のように述べている。

> ナショナル・ギャラリーの評議員は、いつの日か、ナショナル・ポートレート・ギャラリーの核となることが待ち望まれている歴史的人物のポートレートのコレクションを保管している。われわれの歴史や、われわれが現在享受している文明を生み出した人々への理解が次世代にとって非常に重要である今の時代、このようなギャラリーは特に必要である。こういった目的を実現するにあたり、ナショナル・ポートレート・ギャラリーは、将来の世代にとって計り知れない影響を及ぼす、最も重要な価値を教育する力となるだろう[(28)]。

1951 年 5 月 22 日、芸術委員会でのヒアリングにおいてフィンリーは、ハドフィールド裁判所（POB に先立ち、当初 NPG の収容先として考えられていた建物―筆者注）を NPG のために用いることは、芸術委員会と諸機関、そしてこのような愛国的事業に関心のあるワシントン在住の個人から賛同を受けていると説明した後、次のように見解を述べている。

> ワシントンにおけるこのようなギャラリーは、数千人の観光客、特に毎年ワシントンにやってくる生徒や学生の関心を大きく引きつけるでしょう。このギャラリーはアメリカの歴史研究に対する大きな刺激となるでしょうし、また、このポートレート・ギャラリーの設立に関わる労力や資金の少々の支出といった事柄より、何よりも愛国主義や国への愛を育てることとなるでしょう[(29)]。

ロードアイランド州選出のセオドア・フランシス・グリーン（Theodore Francis Green）上院議員は NPG に強い関心を寄せ、設立にあたりフィンリーを手助けした人物である。1951 年 6 月 15 日、グリーンは NPG 設立に関してトルーマン大統領と会談し、大統領から共感の意

を得たことをフィンリーに報告している(30)。1952年7月14日には、フィンリー自身がトルーマン大統領に書簡を宛て、NPG は、アメリカの歴史に関する知識と理解を促す手助けとなるであろうと説明している(31)。グリーンも同年8月18日、書簡にて大統領の説得を試み、最後を次のように結んでいる。

> 私は、大統領が私どもと同じように、愛国主義的精神を養う、国民にとって実に大きな恩恵となるもの（ここではハドフィールド裁判所—筆者註）を譲渡されることにご関心をおもちであると理解しております(32)。

1956年6月1日、調達局（General Services Administration）は、政府がPOB取り壊しから一転、保存を計画中であることを伝え、調達局が担当議員に提出したレポートの一部から、フィンリーの言葉を次のように引用している。

> 「ワシントンの NPG には非常に大きな必要性があるのです」とフィンリー博士は述べた。(略)「こういった類のギャラリーの有用性は、英国の歴史を作ることに貢献した人々のポートレートの有名なコレクションを通じて、NPG ロンドンにて長いこと示されてきました。ワシントンにおけるこの種のギャラリーは、愛国心を涵養することにおいて、またアメリカの歴史の知識を次世代に教育することにおいて、非常に大きな影響を及ぼすに違いありません」(33)。

（4）NPG 草創期における「歴史」

フィンリーが主導した NPG 設立計画において想定されていた NPG の目的が、アメリカの歴史の教育と、愛国心の涵養であったことは明らかであろう。この目的がグリーンや芸術委員会と共有され、大統領にも伝えられていったのである。もちろん、NPG 設立初期の段階において大きな力があったのは誰よりもフィンリーであるが、愛国心や歴史教育をめぐるアイディアはひとりフィンリーに帰せられるものではない。この時期に NPG 設立が実現に向かって動き出したのは、南北戦争100周年記念行事や反共主義による愛国心の高まりの中で、彼のアイディアが関係者に受け容れられたからに他ならず、いわば、NPG 設立の素地となる愛国心や歴史の教育の必要性に対する認識が社会的に成立していたことが大きい。このような空気が公に流れていたことは、NPG 法承認に先立って行われた議会でのヒアリングの記録にみることができる。

NPG 法は、1962年4月27日に最終的に承認されるまでの間に、政府の関係委員会へのレポート提出に加え、上下両院で数度ヒアリングが行われている。NPG 法承認直前の1962年4月16日の下院におけるヒアリングでは、NPG 法の文言や NPG の目的、予算などに関連した質疑が行われている。デラウェア州選出のハリス・B・マクドウェル（Harris B. McDowell）議員は、この時期にワシントンに NPG を設立することについて、次のように発言している。

アブラハム・リンカーン大統領のもと、州の間で起こった戦争という最も暗い日々の中、この教育機関双方（デラウェア大学のような連邦政府から土地を譲り受けて設立されたランド・グラント大学とスミソニアン協会のこと—筆者註）が素晴らしい刺激を得たことを、1962年のここにおいて述べておくのは、特別にふさわしいことであります。

たしかに、この冷戦の時期、革新を引き起こす熱望、国民的熱望が至るところ人々に見られるこの時期、我々自身の文化の適切な発展を助けるための手続きをとることは、私たちの義務であります。

1955年の国会にて、国民へ向けたメッセージの中でアイゼンハワー大統領が、連邦政府は「我々の文明を強め、繁栄させる」よう芸術と他の文化的活動に、援助以上のことをしなければならない、と述べたことを覚えておいででしょう。

我々が、自らの芸術について何をなすのかが他の国々の人々に注目されるであろうことは事実ですし、自由の世界のリーダーとして、そしてあらゆる自由を愛する国民のリーダーとして、我々は他の領域と同様に、文化の領域においても、リーダーシップを発揮しなければならないのは事実なのです(34)。

引き続き、マサイアス議員（Charles Mathias）は次のように述べ、ヒアリングを締めくくっている。

議長、下院は本日、長年にわたり期待され、望まれてきた、スミソニアン協会にナショナル・ポートレート・ギャラリーを設立する法を承認するための一歩を踏み出しました。これは、首都と国家の歴史的、文化的、芸術的生活にとって重要な出来事であります（略）。我々の中でナショナル・ポートレート・ギャラリーを訪問する機会に恵まれた人々は、それがいかに特別な関心と魅力をもっているのかをご存知でしょう。（略）国家の指導者と著名な人々は魅力的であり、専門の歴史家と同じように認識力のある市民にとって、学ぶ価値のあるものです。

私は、ワシントンのナショナル・ポートレート・ギャラリーを歓迎します。私は、NPGが、我々の指導者と英雄をより親しく知ることにより、我々の伝統の活力と強みをアメリカの人々がより理解できるために奉仕するよう、その長く建設的な将来を祈りたいと思います(35)。

マクドウェルの発言は、アメリカを分裂させた南北戦争の記憶をリンカーンから引きつつ、現在の分裂である大きな社会変化と冷戦に言及し、アメリカの文化、「我々の文化」を構築していく必要性を強調している。そして「我々の文化」の源を「自由の世界」、「自由を愛する国民」に求めている点に、共産主義に対抗する愛国主義の根拠を見ることができよう。

一方、マサイアスの発言には、NPG において展示されるべき人々への期待が表れている。彼がここでNPGに収められる人物として想定しているのは、「指導者」と「英雄」であり、こ

れこそが市民が学ぶに値する人々であると述べられているのである。

これまでのところ、フィンリーらをはじめとして、関係者の間にNPGを歴史ミュージアムとすることについての合意はあっても、そこでいかなる歴史が展示され、教育されるべきなのかという展望については、具体的にはほとんど触れられていない。しかし、フィンリーをはじ、関係者の議論において特徴的なのは、「アメリカの歴史の教育」と「愛国心」とが結びついていることである。彼らにとっての「歴史」とは愛国心を促すためのものであり、影の部分を視野に入れたものではない。それは、マサイアスが図らずも明言しているように、「指導者」であり「英雄」から成る歴史である。これが彼らが抱く「NPGが表象するアメリカの歴史像」であったといえよう。

後にナグルが発言することになる「NPGは英雄のポートレートのみを収集するのではない（栄誉の殿堂ではない）」とする歴史ミュージアムとしてのアイデンティティと、この時点でNPGに期待されていた歴史（＝国家の輝かしい達成）とが齟齬を抱えて出発したことを、ここに見て取ることができる。

冷戦や反共主義、エスニシティ問題を反映した分裂が国内に続き、南北戦争100周年をアメリカの統一を強調する契機とする空気は、たしかに19世紀以来の構想であったNPGを現実のものとすることを後押しした。同時にこの状況は、栄誉の殿堂ではない歴史ミュージアムというよりも、我々の文化、アメリカの輝かしいアイデンティティを提示する必要性を生み出し、このような空気のもと、歴史ミュージアムとしてのNPGは、「英雄」や「指導者」にまつわる矛盾を抱えて出発することとなったのである。

おわりに

19世紀以来の構想ながら実現へとたどり着くことがなかったNPG設立が、ついに現実のミュージアムとして一歩を踏み出すこととなったのは、ひとつはアンドリュー・メロンという個人コレクターが、寄贈すべき具体的なコレクションを残していたこと、もうひとつは芸術、政治関係者とのネットワークを活用したフィンリーという個人の強力な運動があったことによる。

「歴史の教育と愛国心の涵養」をNPGの設立目的とした背景には、フィンリー自身の言及にもみられるように、第一に、歴史ミュージアムのモデルとしてのNPGロンドンの存在があり、第二に、1950年代における冷戦と、それを取り込みながら愛国心の涵養とを結びつけた南北戦争100周年記念行事および、アメリカ社会全体の歴史への関心の高まりがあった。このような状況のもと、新たに設立される歴史ミュージアムの目的が愛国心の教育として設定されるのは必然であったといえる。

その一方で、NPGは、いかなる歴史を表象するのかという「歴史」そのものをめぐって、齟齬を抱えて出発することとなった。19世紀にNPGロンドンが誕生して以来、「歴史的に重

要な個人を選択し、その人物が活躍した分野を視覚的に展示すること」は国家の歴史やナショナル・アイデンティティの表象と関わってきた。NPG が出発と共に抱えることとなったこの齟齬は、このような歴史表象のしかたが 19 世紀ほどの支持を得ない現在にあっては、19 世紀的な発想が内包する矛盾であるとすることもできよう。しかしこの矛盾は、ナショナル・アイデンティティの表象と歴史ミュージアムとしての役割との間で、いかにして栄誉の殿堂ではない「歴史ミュージアム」として自らを構築していくのかが NPG の課題であることをも示しているのである。

いかに歴史ミュージアムとして自らを構築していくのか、これは「誰を歴史的重要人物として収集するのか」という問題に結びついていく。「アメリカの歴史として誰を選択するのか」という問いは、同時に「アメリカの歴史から誰が排除されているのか」を問うことを意味する。それは単に、国家の歴史の輝かしい側面を体現する人物のみを選択するか否かにとどまらず、「多様性」の表象の問題—NPG が表象するアメリカの歴史に、ジェンダー、エスニシティ、職業などがどれだけの広がりをもって含まれているのか—が関わってくることとなろう。

ナショナル・アイデンティティに密接に関わる NPG が、誰をいかに選択/排除してアメリカのアイデンティティと、「栄誉の殿堂ではない歴史」を構築するのか、この点については、これらが具体的に問題化していくポートレート選択基準決定の過程を対象に改めて論じたい。

註

(1) Public Law 87-443, 87th Congress, S. 1057, April 27, 1962. NPG はワシントン DC の F ストリートと G ストリート、および 7th ストリートと 9th ストリートに区切られた一角に位置する旧特許局ビル (Old Patent Office Building) に、スミソニアン・アメリカン・アート・ミュージアム (Smithsonian American Art Museum、1968 年 5 月オープン。当時の名称は National Collection of Fine Arts) と共に入っている。ワシントン DC の都市計画を行ったピエール・シャルル・ランファンは、この場所にアメリカ版のパンテオンを建設することを検討していたという。現在 NPG は改装工事のために閉鎖中であるが、展示活動は、巡回展やスミソニアン協会内のスペースにおいて行われている。再オープンは 2006 年の予定である。スミソニアン協会は、英国貴族、ジェイムズ・スミソン (James Smithson) の遺産に基づいて 1846 年、「知識の増加と普及 (increase and diffusion of knowledge)」のために設立された。次の文献がその経緯を概略的に扱っている。Philip D. Spiess 1996 "The Impossible Museum: The Smithsonian celebrates 150 years," *Museum News* 75-4, pp. 42-51.

(2) Charles Nagel 1968 "Introduction," In J. Benjamin Townsend ed. '*This New Man: A Discourse in Portraits*' Smithsonian Institution Press, Washington, pp. 1-2. NPG

のオープニング展示であるこのタイトルは、J・H・セイント・ジョン・ド・クレヴクールの『アメリカ農夫の手紙（*Letters from an American Farmer*）』（1782 年）の一節から取られており、「アメリカ（人）とは何か、その特徴とは何か」というテーマを複数のトピックから検討する構成となっている。ナグルはまた、NPG のコレクションには大統領暗殺者も含まれることを挙げ、NPG が英雄のポートレートのみを収集対象とする、いわゆる「栄誉の殿堂」ではないと述べている。

（3）とはいえ、入手可能なものの中で、できるだけ美的にすぐれたポートレートを得るために、あらゆる努力が払われるとナグルは明言している。Ibid., p.1.

（4）たとえば、文化人類学的アプローチからエスニックなミュージアムや展示を事例に、「異文化展示」におけるエスニック・アイデンティティの表象や、展示する者／展示される者の間に見出される権力関係に注目したもの（James Clifford 1988 '*The Predicament of Culture: Twentieth-Century Ethnography, Literature, and Art*' Harvard University Press, Cambridge；ジェイムズ・クリフォード（太田好信ほか訳 2003）『文化の窮状─二十世紀の民族誌、文学、芸術』人文書院（特に第 9 章、第 10 章）、James Clifford 1997 '*Routes: Travel and Translation in the Late Twentieth Century*' Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts and London；ジェイムズ・クリフォード（毛利嘉孝ほか訳 2002）『ルーツ─20 世紀後期の旅と翻訳』月曜社（特に 5 章から 8 章）、吉田憲司 1999『文化の「発見」─驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで』岩波書店）、ミュージアムとコミュニティとの関係に注目したもの（Ivan Karp, Christine Mullen Kreamer and Steven D. Lavine eds. 1992 '*Museums and Communities: The Politics of Public Culture*' Smithsonian Institution Press, Washington）、歴史的体験や記憶を保存する装置としてのミュージアムという視点から、ワシントンのホロコースト・ミュージアム設立の経緯を詳細に検討したもの（Edward T. Linenthal 1995 '*Preserving Memory: The Struggle to Create America's Holocaust Museum*' Penguin Books, New York）、美術史的関心からルーブル美術館と市民、ナショナル・アイデンティティとの関係を分析したもの（Carol Duncan 1995 '*Civilizing Rituals: Inside Public Art Museum*' Routledge, London, New York）などがある。なお、次の論文集が現在のミュージアムが抱える問題について、理論、ケースの両面からアプローチしている。Ivan Karp and Steven D. Lavine eds. 1991 '*Exhibiting Cultures: The Poetics and Politics of Museum Display*' Smithsonian Institution Press, Washington.

（5）Richard Handler and Eric Gable 1997 '*The New History in an Old Museum: Creating the Past at Colonial Williamsburg*' Duke University Press, Durham and London.

ハンドラーらによると、これまでのミュージアム研究は次の3点に整理される。第一に、人間の多様な集団のイメージを伝えるために、いかにミュージアムがモノを収集、分類、展示するのかという、文化の表象に関心が集中していること、第二に、イデオロギーに関する問題や、文化の表象に関する利害問題を扱っていること（誰がミュージアムを設立し、その内容を選択するのか、いかなるイデオロギーがこれらの選択に内在しているのか）、第三に、オーディエンスに注目していること（ミュージアムは、いかにある観客を歓迎し、他の観客を失望させることで自らのオーディエンスを築いているのか、観客はいかにミュージアムが伝達するメッセージを受容し、抵抗し、あるいは再解釈するのか）。Ibid., pp. 8-9.

（6）アメリカにおける公共のミュージアム設立は19世紀後半にラッシュを迎え、先述のように、スミソニアン協会設立も1846年である。ダンカンが述べるように、アメリカのミュージアム設立に多大な力を及ぼしたのは資本家たちであり、それゆえに、彼らは首都ワシントンよりも、ビジネスや銀行家が集中していたニューヨークにメトロポリタン美術館（The Metropolitan Museum of Art）、ボストンにボストン美術館（Museum of Fine Arts, Boston）、シカゴにシカゴ美術館（The Art Institute of Chicago）の前身となるものを1870年代に設立することとなった。Duncan pp. 48-49.

（7）Marcia Pointon 1992 "Imaging Nationalism in the Cold War: The Foundation of the American National Portrait Gallery," *Journal of American Studies*, 26, pp. 357-375.

（8）Ibid., pp. 358-359. ワシントンのNPGにおける展示構成を中心に、NPGとナショナル・アイデンティティとの関係に焦点を当てたものとしては、John C. Barans 1998 "*Negotiating the American Identity in the National Portrait Gallery*" (A Thesis presented to the Graduate Faculty of the University of Virginia in Candidacy for the Degree of Master of Arts) http://xroads.virginia.edu/~ MA98/ba rans/npg/home.htm（2005年9月検索）がある。

（9）ミュージアムを博物館／美術館へと区別することの問題については、以下の文献に詳しい。Clifford 1988；クリフォード　2003（第9章、第10章）、Clifford 1997；クリフォード　2002（特に5章から8章）、吉田　1999. なお、「国立肖像画美術館」と訳されることもあるNPGであるが、この訳語は以下の3点において問題があるため、本稿では「ナショナル・ポートレート・ギャラリー」と表記することとした。第一に「ナショナル」の部分であるが、スミソニアン協会はたしかに連邦政府の資金を得てはいるものの寄付金にも大きく依存しており、その運営形態は半官半民に近い。「国立」という表記は、このような運営の実態に関し、誤解を招く恐れがある。第二に、現在NPGが収集する

「ポートレート」は「画」に限らず彫像やレリーフ、さらに将来開発されうるあらゆるメディアによるものを対象としている。したがって「肖像“画”」の表記は、コレクションの内容を充分に反映していない。第三に「ギャラリー」を「美術館」と限定的に訳すことは、NPG の目的に基本的にそぐわない。NPG は少なくとも目的上、「歴史のミュージアム」としてオープンしたからである。なお、1968 年のオープン当時、議会図書館が写真コレクションを有していた関係から、NPG は写真を収集対象とすることは許されていなかった。これが可能となったのは 1974 年の NPG 法改正以降である。

(10) http://www.npg.org.uk/live/history.asp（2005 年 9 月検索） NPG ロンドン設立の中心的人物となったのは、フィリップ・ヘンリー・スタンホープ伯爵（Philip Henry Stanhope, 5th Earl Stanhope）であり、彼に協力したのがトマス・バビントン・マコーレー（Thomas Babington Macaulay）、トマス・カーライル（Thomas Carlyle）であった。NPG ロンドンは、1856 年、ヴィクトリア女王の承認のもと 2,000 ポンドの資金を得てスタートすることとなり、1856 年 12 月 2 日に公式に開館した。NPG ロンドン設立をめぐる背景のひとつとして、当時の銅像設立ブームや、ヴィクトリア朝中期以降の偉人顕彰の流行との関係を指摘するものがある。光永雅明 1999「銅像の貧困―19－20 世紀転換期ロンドンにおける偉人銅像の設立と受容」『記憶のかたち―コメモレイションの文化史』（阿部安成ほか編）柏書房 pp.81～118.

(11) Pointon 1993 p229. ペリーも同様の指摘を行っている。Lara Perry 2000 “The National Portrait Gallery and its constituencies, 1858-96,” In Paul Barlow and Colin Trodd eds. ‘*Governing Cultures: Art Institutions in Victorian London*’ Ashgate Publishing Company, Burlington (Ashgate Publishing Limited, Hants), p.146. また、各国の産業力を見せつける場であり、ミュージアム設立に一般的に大きな影響力のあった 1851 年のロンドン万博の開催などもナショナル・アイデンティティとの関連においてNPG ロンドン設立の背景を成していよう。National Portrait Gallery, London 1982 ‘*National Portrait Gallery: A Souvenir Guide*’ p. 1. 吉見俊哉 2001（初版 1992）『博覧会の政治学―まなざしの近代』中公新書（特に第 1 章）.

(12) Brandon Brame Fortune 1990 “Charles Willson Peale’s Portrait Gallery: Persuasion and the Plain Style”, *Word & Image*, 6, p.308. ミュージアムに関するピール自身の言及は、次の書簡集を参照。Lillian B. Miller et al., eds. 1998 ‘*Charles Willson Peale: The Artist as Museum Keeper, 1791-1810*’ Yale University Press, New Haven. ピールの作品や経歴については NPG で行われた展示のカタログが包括的である。Edgar P. Richardson, Brook Hindle, Lillian B. Miller 1982 ‘*Charles Willson Peale and His World*’ Harry N. Abrams Inc., New York.

(13) James Barton Longacre and James Herring eds. 1970 ‘*The National Portrait Gallery of Distinguished Americans*’, Vol. 1~4 Arno Press and The New York Times, New York.（初版出版はフィラデルフィア、1834年～1837年） この出版物の目的は、出版予告のチラシに「アメリカの最も優れた市民のポートレートを提示すること」と明記されているが、同時にある種のアーカイブス的な役割も意識されていたことは次のような言及から読み取ることができる。「わが国には、最も卓越した個々人のポートレートや、彼らに関連する重要な書類を保存するための中心的収蔵庫が存在しない。これらの素材はわが国の歴史と栄誉とに不可欠であるが、その価値に不完全にしか気づいていない人々の手にあり、当然のことながらその保存には無関心である」、「我々は、パトリオティズムの刺激や名誉、わが国の芸術に強く影響を受けたすべての人々により、(中略) 勇気ある人々、名誉ある人々を称賛する国家的な謝意を表わすモニュメントとして、また、世界にこの共和国の気高い運命を示す高潔な到達として、この仕事が受けとめられるよう努力してきた」（Robert G. Stewart 1969 “Introduction,” In ‘*A Nineteenth-Century Gallery of Distinguished Americans*’ Smithsonian Institution Press, Washington, pp. 7-8.）ポートレートを収めた伝記集としては、1815年、ジョセフ・デラプレインに（*Joseph Delaplaine*）よる『卓越したアメリカ人の生涯とポートレート（*Repository of the Lives and Portraits of Distinguished American Characters*）』が最初のものであるとされている。Ibid., p. 3. なお、この時代における伝記集刊行はアメリカに特殊なのではない。ヴィクトリア朝ロンドンにおいても同様の現象が見られ、これとの直接の影響関係を示す伝記集もある。実際、ロングエーカーらの出版物は1833年から1837年にかけてロンドンにおいて出版された『ポートレートのギャラリー――伝記と共に（*The Gallery of Portraits; With Memoirs* 全5巻）』から着想を得ている。Stewart pp. 2-3.

(14) 具体的な伝記集名やそれぞれの特徴については、以下に詳しい。Daniel J. Boorstin 1965 ‘*The Americans: The National Experience*’ Vintage Books, New York, pp. 365-367.

(15) 野村達朗編著 2003『アメリカ合衆国の歴史』ミネルヴァ書房 pp. 117-125. 各地にこれらの施設を寄贈したのは、工業化によって成功した実業人を中心とする富裕者層であった。公共ミュージアムの設立には、「寄贈」といった慈善的な目的ばかりではなく、彼らが自らの経済力、政治力を国内外に示す意図があったことが指摘されている。Duncan p. 54. 本稿が扱うNPG設立までの経緯の中では直接問題とはならないが、アメリカにおいてはミュージアムに限らず、モニュメントや史跡などを含む歴史表象に関して、連邦政府機関などの「官」のみならず、民間が少なからぬ力を及ぼしているが、

両者間における力学がミュージアムの方向性にかなりの程度関わってくることも、念頭においておくべきであろう。このようなポリティクスと NPG における歴史表象との関係は、現在の NPG が抱える問題のひとつである。詳しくは、次を参照のこと。Michael Kammen 1993 '*Mystic Chords of Memory: The Transformation of Tradition in American Culture*' First Vintage Books, New York.

(16) Boorstin pp. 365-367.

(17) Joel J. Orosz 1990 '*Curators and Culture: The Museum Movement in America, 1740-1870*' Alabama University Press, Tuscaloosa and London, p. 182.

(18) Margaret C. S. Christman 2001 "The National Portrait Gallery," In '*A Brush with History: Paintings from the National Portrait Gallery*' National Portrait Gallery, Washington, pp. 12-14.

(19) 芸術委員会（The Commission of Fine Arts）は、芸術、特にワシントンの建築物の開発に関する助言を政府に対して行うことを目的に、1910年に設立された。Sue A. Kohler 1977 '*The Commission of Fine Arts: A Brief History, 1910-1976*' The Commission of Fine Arts, p. 1.

(20) ナグルの記述による。Charles Nagel 1966 "The National Portrait Gallery", *Antiques*, November, pp. 642-646. コレクターとしてのメロン、および彼と NPG との関係については次の文献で触れられている。David Edward Finley 1973 '*A Standard of Excellence: Andrew Mellon Founds the National Gallery of Art at Washington*' Smithsonian Institution Press, Washington, p. 32; John Walker 1974 '*Self-Portrait with Donors: Confession of an Art Collector*' Little, Brown and Company, Boston, p. 131.

(21) "Smithsonian' s National Portrait Gallery Accepts Key Collection", Smithsonian Institution Press Release, February 24, 1965, Vertical File (Smithsonian Institution National Portrait Gallery, Press Releases, 1965-1969), Smithsonian Institution Libraries, AAM/NPG Library.

(22) 野村達朗編著　2003『アメリカ合衆国の歴史』ミネルヴァ書房　pp. 228-231.

(23) Kammen p. 602.

(24) Ibid., p. 602. 委員会の委員およびスタッフは、自らが共産主義者やファシストではないことを宣誓、署名することが求められていたという

(25) ジョン・ボドナー（野村達朗ほか訳　1997）『鎮魂と祝祭のアメリカ―歴史の記憶と愛国主義』青木書店　pp. 314 - 317.

(26) Public Law 85-357, 85th Congress, S. 1984, March 28, 1958.

(27) “Excerpt from Minutes of meeting of Commission of Fine Arts” , June 22, 1944, “Letter from Finley to President” , November 27, 1946, “Excerpt from Minutes of Commission of Fine Arts (with Suggestion for a Bill to organize a National Military Museum, “A Bill”)” , March 28, 1947, David E. Finley’ s collection of letters, papers, congressional bills, etc. relating to the National Portrait Gallery beginning in 1944 (plan of Commission of F.A.), Box 3 “Historical background to establishment of NCFA and NPG, Art collections housed in SI buildings prior to opening of NCFA and NPG in P.O.B.,” Smithsonian Institution Libraries, AAM/NPG Library (以下、Finley File と表記) . フィンリーはこのファイルに次のメモランダムを付している。「トルーマン大統領は、軍事ミュージアムの計画を作成するための助言委員会を指名した。この計画は実行に移されることはなかったが、NPG のアイディアの一因となっている (略)」。“Memorandum for the Files,” April 30, 1964, Finley File.

(28) David E. Finley 1950 “Introduction,” In ‘*Makers of History in Washington, 1800-1950*’ National Gallery of Art, Washington, p.10.

(29) “Statement of David E. Finley, Director, National Gallery of Art at hearing of the Commission of Fine Arts” , May 22, 1951, Finley File.

(30) “From Theodore Francis Green to David E. Finley,” June 15, 1951, Finley File.

(31) “From David E. Finley to Mr. President,” July 14, 1952, Finely File.

(32) “From Theodore Francis Green to David E. Finley,” August 19, 1952, Finley File.

(33) “GSA News R, GSA 445,” June 1, 1956, Finley File. なお、1960 年 2 月 18 日、NPG 設立に関するスミソニアン協会理事会が招集された。この席で NPG 法の草案が提起され、法に基づく NPG 設立承認が以後進められていくことになる。“Minutes of Meeting, Smithsonian Institution Board of Regents Committee on the Proposed National Portrait Gallery,” February 18, 1960, Smithsonian Institution Archives, Accession Num. 01-167, Box 1.

(34) House Passage of S. 1057, April 16, 1962, p. 13.

(35) House Passage of S. 1057, April 16, 1962, p. 17.